

## 指の五人兄弟      ルーマニア

昔むかし、あるところに、人差し指のピッキーと、中指のリッキーと、薬指のチッキーと、小指の小さなミッキーが、親指トッキーといっしょに、なかよく暮らしていました。

親指トッキーは、いつもみんなに、「四人だけで遊びに行つてはいけないよ。あぶない目にあうからね」といつていました。ところが、ある日のこと、ピッキーとリッキーとチッキーとミッキーは、親指トッキーをうちに残して、自分たちだけで野原に遊びに出かけてしまいました。

人差し指のピッキーは、

「ぼくが道案内するよ」といつて、先頭に立って、歩いて行きました。そのあとから、中指のリッキーが、

「ぼくは、みんなのリーダーになって命令するよ」といつて、歩いて行きました。そのあとから、薬指のチッキーが、

「ぼくは宝物を運ぶ役だ」といつて、指輪をかついで歩いて行きました。最後に小指の小さなミッキーが、

「ぼくは、いい知恵を出してあげるよ」といつて、あとからついて行きました。

まもなく、四人は川に出ました。けれども、橋がこわれていて渡れません。小指のミッキーは、中指のリッキーにいました。

「きみは足が長いんだから、川岸を歩きまわつて、どこかに橋がないかさがして来てよ。ぼくたち、そのあいだにボートを作つておくよ」

リッキーが橋をさがしに行つてしまうと、ピッキーとチッキーとミッキーは、ボートを作ることになりました。すると、うまいぐあいに、ヤシの実が見つかりました。チッキーは、

「このヤシの実を半分にわつたら、ボートになるぞ」といいました。そこで、ピッキーとチッキーは、ヤシの実を両方からつかまえて、力いっぱい引つ張りました。すると、ヤシの実は、ぼつかりふたつにわれました。三人は、さっそく、ヤシの実の中身をほじくり出して、からを川にうかべました。

そこへ、リッキーがもどつて来ました。

「橋なんか、どこにもなかったよ」と、リッキーがいうと、ミッキーは、

「もう橋なんかなくても平気なんだ。ほら、ボートができたんだ」といいました。

四人は、ヤシの実のボートに乗りこみました。

向こう岸に着くと、四人はボートから下りて、どんどん歩いて行きました。ピッキーが先頭で道案内をし、リッキー、チッキー、ミッキーと続きました。

しばらく行くと、広い庭がありました。庭には大きなハチミツのつぼが置いてありました。ピッキーはつぼに頭をつつこんで、ハチミツをなめてみました。あんまりおいし

かったので、ピッキーはだんだんつぼのおく深くもぐりこんでいきました。

みんなは、先へ行きたかったのですが、ピッキーはつぼから出て来ません。リッキーが、

「出て来て道案内をしてよ」と命令しましたが、ピッキーは出て来ません。ミツキーは、「ハチミツの持ち主がやって来るかもしれない。ぼくたち、きつとひどい目にあうぞ」といいました。

そのとき、大きなくまがあらわれて、おそろしいなり声をあげました。

「ほほう。おまえたちはどろぼうだな。さあ、おまえたち、みんな、食ってやる」

みんなは、びつくりぎょうてん。くまの前にひざまずいてあやまりました。

「ごめんなさい。ぼくたち、このハチミツがくまさんのものだって、知らなかったんです」

けれども、くまはゆるしてくれません。そのとき、ミツキーがいいことを思いつきました。

「ねえ、やさしくまさん。ぼくたち、ほんとうは、五人兄弟なんだ。いちばん兄さんの親指トツキーは、家でお留守番してるんだ。ちよつと待っててくれれば、ぼく、うちに帰って、トツキーを連れて来るよ。みんないっしょに、くまさんに食べられてあげるよ」

はらぺこのくまは、食べ物が増えるんなら、いっこうにかまわないといって、よろこびました。

ミツキーは、急いで家に走って帰りました。トツキーは、

「ほらごらん。四人だけで遊びに行つてはいけないって、いったじゃないか」といっておこりました。それから、大きなぼうを持つて、ミツキーについて行きました。

ハチミツの庭に着くと、みんなでぼうをにぎりしめて、くまをひと打ちにしてみました。それから、みんなで家に帰りました。

それからというもの、みんなは、親指トツキーを残して出かけることはなくなりました。いつも、ピッキーが道案内をして、そのあとから、リッキー、チツキー、ミツキーが続きました。トツキーは強い力でみんなを守り、ミツキーは、すばらしい知恵でみんなを助けました。

そんなわけで、今でも何かいい思いつきがあると、こういふのです。

「これは、小指が教えてくれたのさ」  
おしまい